

大連日本人学校の特色と教育課題

前大連日本人学校 校長

徳島県鳴門市立黒崎小学校 校長 濱

徹

キーワード：日本人学校、国際交流、バイリンガル、教育課題

1. はじめに

私は、平成26年度文部科学省派遣教員として、中華人民共和国大連日本人学へ着任した。この度「在外教育施設における指導実践記録集 第40集」の紙面をお借りして大連日本人学校での3年間の教育実践・課題などについてその概要を紹介する。

2. 大連日本人学校の概要

(1) 設立の目的と歴史

大連日本人学校は、大連市に在住する日本人子女を対象に、中国の法律に定まる範囲内で日本国憲法、及び日本の教育法令に即して心身の発達に応じ、幼児・初等・中等教育を施すことを目的としている。

1988年以降、大連に進出する日本企業は急速に増大した。そこで、大連日本商工クラブ（現・大連日本商工会）に大連日本人補習校運営委員会を設置し、開校を目指して諸準備を始め、1994年（平成6年）4月1日、文部省（現・文部科学省）より日本人学校として認可された。2015年（平成27年）4月1日、大連市経済技術開発区の校舎を賃貸契約し、学校を移転した。



大連日本人学校全景

(2) 子どもたちの様子

幼稚園・小学部・中学部に約180名が在籍していた。「明るく素直」な児童生徒が多く、男女・学年の区別なく仲がよく、学習においてもまじめに取り組んだ。子どもたちには、自ら学校をより良くしていこうという気風が代々受け継がれ、児童生徒会では毎年のテーマを決め、自ら主体となって活動をした。

(3) 教職員の様子

文部科学省派遣教員12名、学校採用教員9名、現地中国人スタッフとして、事務・通訳4名、幼稚園助手3名、運転手2名、警備員8名、清掃員1名、総勢39名の教職員で教育にあたった。他にも週1日だけではあるが、中国語や英語の講師も授業を担当した。

(4) 教育目標

学校教育目標は、「力あふれる 心豊かな 世界に生きる子どもの育成」である。そして、重点目標として『言語活動と言語環境の充実』と『コミュニケーション力の育成』を挙げ、日本語の美しさに気づき、語彙力を高め、伝え合い、わかり合える子どもの育成を目指した。

3. 特色ある教育活動

本校では、中国のカレンダーに沿って学校行事を策定した。反日感情への配慮が必要なため、時期や内容について大連領事事務所との緊密な連携の基、立案をした。ここでは、国内において比較的实践例の少ない活動について紹介する。

(1) 現地校との交流学习

特色ある教育の推進として、中日友好を基本とした交流学习を進めた。学校移転に伴い、「開発区第四中学」

「新城小学」が新しい交流校となった。

中学部は、第四中学へ出向き、バドミントン部と卓球部の活動を一緒に体験することを通して、友好のきっかけをつくることができた。その他の部活の生徒たちも笑顔で温かく迎え入れてくれた。

小学部は、新城小学4年生を本校に招き、日本文化を紹介することとおして、日本の伝統文化を知ってもらうとともに、本校の児童が改めて日本の良さについて学ぶことを主なねらいとして実施した。両校とも、これからの大切なパートナーとして、さらに絆を強くしていくとともに、他の学年へも中日友好の輪を広げていくことを確認した。

(2) 学校で働くスタッフに感謝する会

本校には、通訳事務・運転手・中国語、英語教員・清掃員・警備員の方々が勤務している。日頃お世話になっているスタッフを紹介し、たくさんの方々に支えられていることに感謝の気持ちを持ち、スタッフのみなさんと心を通わせることができるきっかけとすることを主なねらいとした。児童生徒会が主体となって計画・準備・実践のすべてに主体的に取り組んだ。

(3) 中国語の授業

全児童生徒は、各学年週1時間の現地語（中国語）学習に取り組んだ。本校独自の教科書を作成し、教育課程外の時間で習熟度別に5つのクラスに分け、中国語を母国語としている教師と日本人教師のT T体制で進めた。また、「今週の中国語」と題して、教職員の寸劇により楽しく中国語を学ぶ時間も設定し、子どもたちの学習意欲を高めていった。「開発区第四中学」「新城小学」との交流において、児童生徒同士により深い心の交流のために、日常生活と関連させた題材により、コミュニケーション能力の向上をねらいとして取り組んだ。



現地語（中国語）学習

4. 学校が抱える教育課題

(1) バイリンガルであるが故の学力の伸び悩み

年々増加するいわゆるハーフ児童生徒の割合は、平成28年度当初には過半数を超えた。語学の授業以外は、日本人教師によって日本語で行われている。しかし、休み時間や家庭では、中国語で話す割合が高まる。器用に使い分けることができるが、どちらの言葉の習得も鈍化し、学習の壁を乗り越えることができない。

バイリンガルであるが故に言葉の習得、及び学力の向上を妨げている現実がある。『学力向上と関連させた日本語の習得』こそが、本校の喫緊の教育課題と言える。

(2) 課題解決への取り組み

「日本へ帰国したときの学力の保障」いわゆる軟着陸をさせることは日本人学校の目的の1つである。すべての教育活動において十分な教育効果を得るためには、発達段階に応じた適切で正しい日本語力が必要だ。

現地の学校に在籍していた経緯がある子どもでも、「日本人学校に通わせれば自然に日本語が身につき、学力の向上も期待できる」このように考える保護者は少なくない。

しかし、これには大きな落とし穴がある。友達同士の意思疎通が図れているから授業内容も理解する力があるとは言えない。『生活言語』と『学習言語』の違いを十分に理解し、将来への構想を持った上で教育に当たらなければ期待する教育効果は得られない。

本校では、日本語彙力向上のために「言語活動、言語環境の充実」と「コミュニケーション能力の育成」を重点目標の一つに挙げ、具現化に向け次のような方策を行った。

①全教職員による児童生徒理解

全教職員が個々の児童生徒に対する関わりを適切にすることで教育効果を上げることをねらいとして、個別の指導計画を基に毎月1回の頻度で会議を行った。実態の報告・保護者、担任、児童生徒からの願い・長期短期目標と具体的な手立ての確認、修正を主な内容とし、指導方針がぶれないように心がけた。

②「書く力」に焦点を絞った指導

学習の基本である「書く」ことに重点を置き、全校すべての教育活動において感動体験を見逃さず、「書こう」とする意欲に結びつけることを継続することを確認した。お誕生日カードや良いとこメッセージ等、遊びの中で書く工夫から始め、思いつくと同時に付箋に書いて台紙に貼っていく。心に響く日本語は教科書の中のみならず校内の至る所にあふれた。

まずは、感動体験や楽しさを味わい、書いてみる。そして、他者に対して自分が書いた言葉が伝わる楽しさ、褒められる喜びへとつなげることを重ねた。

③美しい日本語を「知る」「使う」

言語環境の充実のため、各教室や廊下に子どもたちが書いた作文・詞・俳句・感動した言葉を掲示した。担任からのコメントはもちろんだが、友達からのコメントを付箋で貼ることで、友達同士のコミュニケーションが深まり、美しい日本語探しや作文への執筆意欲がしだいに高まった。

④家庭との協力

日本語語彙を増やすためには、家庭の協力が不可欠である。長期休業終了時には、児童生徒の日本語力が振り出しに戻っていることがよくあった。原因は、中国人の保護者に対して語彙力向上の重要性について十分に伝えることができていなかったこと。具体的な宿題の提示が不足していたこと等が挙げられる。

保護者との共通理解については、家庭との相互連携が何より大切である。学校からの一方だけでなく、相互に具体策を提示し合い、通訳を交えて徹底的に理解することで、持続可能で子どもの実態に応じた指導計画が実践できた。

5.おわりに

本校の子どもたちは様々な人々との触れ合いの中で自己を見つめ、新しい可能性を伸ばしていた。そして、日本・中国各地から集いし教職員は、切磋琢磨しながら研究を進め、子どもたちと共に学び、更なる充実した教育活動を目指して、日々全力で取り組んできた。私たちは、課題のすべてをチャンスと捉え、大連で暮らす子どもたちの「できた喜び」であふれる学校づくりを目指し、鋭意努力を重ねた。